

個人特性が心理学科オリエンテーションに 対する態度に及ぼす影響（3）

—— 出身校，居住形態との関連から ——

心理学科 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮

抄録：心理学科の新入生を対象としたオリエンテーションにおいて，学生たちがそのような企画に何を期待し，何を得たと考えているかについて，学生の個人差の観点から検討を加えた。本研究において検討された個人差は，大学生生活をスタートする際の大学内の交友関係に影響を及ぼすと想定された出身校（内部生 vs 外部生）と，大学生生活をスタートする際の大学外の交友関係に影響を及ぼすと想定された居住形態（自宅生 vs 下宿生）の2つであった。これらの要因とオリエンテーションに対する態度との関連を検討したところ，内部生よりも外部生で，大学で親しい交友関係を築いたり，自分の生活の場についての情報が得たりする機会をより積極的に，強く求めていること，またオリエンテーションを企画として充実したものであると考えていることなどが示された。また自宅生と下宿生といった個人差がオリエンテーションへの期待や評価あるいは学生生活の満足感に与える影響はあまり大きくなく，このことはオリエンテーションそのものがあくまでも大学内での交友関係や適応といったものを射程にしていることによる結果であると解釈された。

索引語：新入生対象のオリエンテーション，学生生活，出身校，居住形態

問題と目的

大学教育が十全に実践されるためには，その初動時における体制の確立が重要である。新入生にとって大学での学習は，高校までのそれとは大きく異なるため，早い段階での方向付けが必要とされる。多くの大学において，こうした観点から新入生に対して春期の時点で“オリエンテーション”あるいは“学外オリエンテーション”といわれる企画が実施されている（藤田，2002）。

佐久田・奥田・川上・坂田（2003），奥田・川上・坂田・佐久田（2003）は，大学において実施されている企画を狭義のオリエンテーションと定義し，こうしたオリエンテーションに対して学生がもつ期待や，実際に経験したオリエンテーションから，何を獲得したと感じているのかを質問紙

調査によって吟味した。

オリエンテーションに対する態度を測定するため，佐久田ら（2003）は，3つの質問群からなる質問紙を実施した。これらは，“学外オリエンテーション期待尺度（E尺度）”，“学校生活満足尺度（S尺度）”，“本年度オリエンテーション獲得尺度（G尺度）”の3つの尺度からなっていた。

E尺度では，大学側が学外オリエンテーションとして提供し得るであろう企画内容をもとに，それらをどの程度学生が望むのか，すなわち「学生が入学して初めの頃にどのような企画を体験すれば，後の大学生活にとって良いと考えているか」を測定した。具体的な項目としては「大学の授業に関する情報を得る機会」や「先生と親しくなる機会・きっかけ」などを挙げ，これらをどの程度期待するのかを5件法で評価することを求めた。

S尺度では、学生が学業や人間関係を含めて、どの程度今の学生生活に満足し、充実していると感じているか、を測定した。具体的な項目としては「学びたいことを大学で学んでいる」、「これからの大学生活の先が見えず不安である」などを挙げ、これらにどの程度当てはまるのかを5件法で評価することを求めた。

G尺度は、ある程度内容をE尺度と対応させつつ、当該年度のオリエンテーションの企画内容を考慮し、これを反映させて作成した。実際に一回生たちが当該年度のオリエンテーションを体験して、どのように感じ、何を得たと思っているのかを測定した。

そして佐久田ら(2003)は、オリエンテーションに対する期待に関する質問項目(E尺度)と、大学生活に対する満足度(S尺度)とを合わせて因子分析を行い、5つの因子を抽出した。それらは、「企画期待」「機会期待」「学業満足」「交友満足」「将来展望」の5つであった。

「企画期待」因子は「大学ではないどこか他の場所への遠出」、「泊まりがけの旅行」など、オリエンテーションを通常の授業とは違うことを行う一つの企画・イベントとして期待する態度を示す因子であると考えられた。

「機会期待」因子は、「上回生(二回生や三回生)と親しくなる機会・きっかけ」、「学生生活とはどんなものか聞く機会・きっかけ」など、オリエンテーションの場を誰かと知り合う、あるいは何かを知る機会として期待する態度に関する因子であると考えられた。

「学業満足度」因子は、「大学の授業が面白い」、「心理学科の授業内容に満足している」などの項目からなり、大学生活の学業面での満足度を示す因子であると考えられた。

「交友満足度」因子は、「学内の友人関係に満足している」、「大学で本当に親しい友人はいない」など、大学生活の交友面での満足度を表す項目から構成されており、おもに大学内の交友関係に対

する満足度を示す因子であると考えられた。

「将来展望」因子は、「資格について知る機会・きっかけ」、「将来の進路について不安である」などの項目から構成されており、自分の将来に対する意識や不安の高まりを表す因子であると考えられた。

また佐久田ら(2003)は、獲得に関する質問項目(G尺度)を因子分析し、5つの因子を抽出した。それらは、「一回生との親密化」「企画充実感」「上回生からの情報獲得」「教員との関係」「獲得困難」の5つであった。

「一回生との親密化」因子は「他の一回生と親しくなれた」「友人関係の輪が広がった」などの、同級生とのつながりに関する項目から構成されている。

「企画充実感」因子は「人間知恵の輪が楽しかった」などの、オリエンテーションで実施した企画の充実感に関わる項目から構成されている。

「上回生からの情報獲得」因子は「授業について情報を得た」、「二回生との会話が今後の役に立った」など、主に上回生との会話を通じて情報を獲得することに関わる項目から構成されている。

「教員との関係」因子は「先生との会話が楽しかった」などの、教員とのつながりに関する項目から構成されている。

「獲得困難」因子は「大学の施設についての情報を得た」「資格についての情報を得た」「特定の人と深く付き合えるようになれた」などの項目から構成されている。当該年度のオリエンテーションが一回生同士あるいは上回生や教員とのコミュニケーションを深めるための橋渡しの役割を担うことを中心に企画されたことから、これらの情報を獲得するのは困難であったと考えられる。そして、こうした獲得困難な内容が一つの因子としてまとまって評価されたのであろう。

奥田ら(2003)においては、こうしたオリエンテーションに対する態度と個人特性としてのpersonalityとの関連性について検討がなされた。

その結果、オリエンテーションを“楽しむ”企画として期待を寄せる側面と、オリエンテーションを対人関係等の端緒とすることに期待する側面が窺われ、特に後者の達成には personality の諸側面が様々に関与していることが示唆された。このことから、学生生活を基盤づけるような対人関係の充実を促すきっかけとして、オリエンテーションを企画することが重要と考えられた。

本研究では、佐久田ら（2003）、奥田ら（2003）のデータをさらに詳細に分析し、personality 以外の個人差要因が、オリエンテーションに対する態度とどのように関連しているのかを検討する。

佐久田ら（2003）、奥田ら（2003）における調査対象者は、筆者らが所属する大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科の一回生、二回生であった。大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科は、平成13年4月に新設された学部、学科であり、調査実施当時にキャンパスには一回生と二回生しか存在していない。三回生以上の上回生が存在しないことは対象者におけるオリエンテーションの重要性を高める要因であると考えられる。なお大阪樟蔭女子大学は、附属校として樟蔭中学校、樟蔭高等学校を擁し中高大一貫教育を展開しているため、新入生の中には一定人数の内部進学者が存在する。本研究においては、樟蔭高等学校からの内部進学者を内部生、樟蔭高等学校以外の高校からの進学者を外部生と定義し、こうした出身校の違いがオリエンテーションに対する態度にいかなる影響を及ぼしているのかを検討することを第一の目的とする。

こうした出身校の違いに注目する理由は以下の通りである。およそ3割を占める内部生は、必ずとは言えないまでも、“新入生”の3割近くが顔見知りであり、中には高校時代からの親しい友人が、新入生の中に含まれていることもあるだろう。

こうした観点から見れば、内部生と外部生とでは、大学における交友生活をスタートさせるため

のオリエンテーション自体がもつ意味が、自ずから異なっているとも考えられる。たとえば植村（2003）は、高校への進学に際して、内部生と外部生との適応過程を比較している。

そこで本研究では、オリエンテーションに関わる個人差要因として、出身校（内部生か外部生か）を取り上げ、この個人差が、オリエンテーションに対して学生が持つ期待と、実際に経験したオリエンテーションに対する態度とにどのように関連しているのかを検討する。

また本研究ではもう一つの個人差要因として、その居住形態を取り上げる。ここでいう居住形態とは、家族と自宅で生活しているか、下宿で一人暮らしをしているのかの差異である。ここでは家族と自宅で生活している学生を自宅生、下宿で一人暮らしをしている学生を下宿生と呼ぶ。

先に出身校を問題にしたのは、大学内における交友関係が、この要因によって異なると考えられるからである。居住形態を問題とするのは、大学外における交友関係が、この要因によって異なると予想されるからである。下宿生の多くは、高校生活を送っていた地域（地元）を離れて、大学通学圏内での下宿生活を送っている。特に一回生については、新しい生活を始めた大学通学圏内の地域にも慣れず、また高校以前からの友人も、この地域には少ないことが予想される。このように考えれば、自宅生が高校生活を送っていた地域での交友関係を持ち越したままで大学生活をスタートさせようとしているのに対して、下宿生は高校生活を送っていた地域での交友関係とは物理的に切り離されて大学生活をスタートさせようとしていると予想される。こうした違いは、大学外における交友関係に関わる差異となることが考えられる。

すなわち本研究では、大学内での交友関係と関わる要因としての出身校（内部生か外部生か）と大学外での交友関係と関わる要因としての居住形態（自宅生か下宿生か）とが、オリエンテーションに対する態度とどのように関連しているのかを

検討する。具体的には前述のオリエンテーションに対する態度を構成する10個の因子得点に、出身校あるいは居住形態による差異が認められるか否かを検討する。本研究で処理の対象とするデータは、佐久田ら(2003)、奥田ら(2003)と同一のものである。したがって、獲得に関する5つの因子について、心理学科オリエンテーションを終えた一回生のデータのみが存在し、心理学科オリエンテーションに対する期待、および大学生活に対する満足度に関する5つの因子については、一回生および二回生のデータが存在する。こちらの5因子に関しては、出身校、居住形態について、横断データではあるが一回生と二回生との学年差を考慮した分析を行うため、出身校と学年、居住形態と学年、といった形の二次元的なデータとして取り扱う。

方法

被検者

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科に所属する一回生138名、および二回生139名、計277名が調査に参加した。

調査実施日

2002年5月、授業時間内に質問紙調査を実施した。特に一回生に対する調査は、質問内容を考慮し、4月に行われたオリエンテーションから時間が経過し過ぎることのないよう、1ヶ月以内に実施した。また二回生に対する調査も、一回生と比較検討を行うことを考慮し、ほぼ同時期に実施した。

質問紙の構成と質問項目

一回生に対しては、

- ① 学外オリエンテーション期待尺度 [E尺度] (17項目・5件法)
- ② 新性格検査 [NPI] (130項目・3件法)
- ③ 学校生活満足尺度 [S尺度] (10項目・5件法)
- ④ 本年度オリエンテーション獲得尺度 [G尺度] (26項目・5件法)

という内容から構成された質問紙を作成し実施した。二回生に対する質問紙は、一回生に対する質問紙から④のG尺度を除外し^(注)、①のE尺度の説明文を「入学して初めてのころにどのような企画を体験していれば良かったと思うか」という一回生当時を想定した問いに変更した。以上の変更点以外は、二回生に実施した質問紙は一回生に実施したものと同一のものであった(個々の尺度・質問項目の詳細については佐久田ら(2003)を参照)。

本研究においては、②の新性格検査[NPI]については分析の対象としない。

本研究では、①のE尺度と③のS尺度から佐久田ら(2003)の結果にしたがって、“企画期待”“機会期待”“学業満足”“交友満足”“将来展望”の5つの因子得点を、それぞれ対応する尺度得点の平均値として定義し、算出した。

また④のG尺度から佐久田ら(2003)の結果にしたがって、“一回生との親密化”“企画充実感”“上回生からの情報獲得”“教員との関係”“獲得困難”の5つの因子得点を、それぞれ対応する尺度得点の平均値として定義し、算出した。

手続き

被検者は調査目的を説明され、了解を得た上で調査に参加した。調査票は授業時間内に一斉に配布され、被検者には、その場で、各自のペースで質問紙に回答することが求められた。

(注) 二回生は、一部がスタッフとして当該年度のオリエンテーションにも参加したが、多くは体験していないため、④の内容は除外した。

結果と考察

1. オリエンテーション期待尺度 (E 尺度)・学生生活満足尺度 (S 尺度) の下位尺度得点による内部生と外部生の比較

オリエンテーションに対する期待や学生生活に対する満足度が、大学入学以前からの交友関係を比較的そのまま引き継いでいる内部生と新たに交友関係を築いていく必要のある外部生とでどのような違いがあるのか、またそれが大学生生活の経験を積むにつれてどのように変化するかについて検討するために、E 尺度・S 尺度の各下位尺度得点に関して出身校 (内部生/外部生) と学年 (一回生/二回生) を要因とする 2 要因分散分析を行った (表 1)。

その結果、以下のような特徴が見られた。ただし、学年差の分析結果に関しては佐久田ら (2003) において既に報告したので、重複を避けるため、今回の分散分析における学年の主効果についての記述は省略した。

① “機会期待” 得点において、出身校と学年の交互作用が有意であった ($F_{(1,265)} = 10.15, p < .01$)。単純主効果の検定を行ったところ、一回生でのみ内部生と外部生に有意差が見られ ($F_{(1,265)} = 14.01, p < .01$)、外部生の方が内部生より“機会期待”得点が高かった。一方、二回生では内部生と外部生との間で有意差は見られなかった ($F_{(1,265)} = 1, ns$)。また、内部生では二回生の方が一回生より“機会期待”得点が高い ($F_{(1,265)} = 5.96, p < .05$) のに対し、反対に外部生では一回生の方が二回生より“機

会期待” 得点が高い ($F_{(1,265)} = 4.26, p < .05$) という対照的な結果が得られた。

- ② “学業満足度” 得点において、出身校の主効果が有意 ($F_{(1,264)} = 11.95, p < .001$) であり、外部生の方が内部生より“学業満足度” 得点が高かった。
- ③ “将来展望” 得点において、出身校と学年の交互作用が有意であった ($F_{(1,261)} = 9.73, p < .01$)。単純主効果の検定を行ったところ、二回生でのみ内部生と外部生に有意差が見られ (一回生: $F_{(1,261)} = 2.24, ns$, 二回生: $F_{(1,261)} = 8.50, p < .01$, 内部生の方が外部生より“将来展望” 得点が高かった。また、内部生でのみ有意な学年差が見られ (内部生: $F_{(1,261)} = 23.60, p < .01$, 外部生: $F_{(1,261)} < 1, ns$), 二回生の方が一回生より“将来展望” 得点が高かった。
- ④ “企画期待” 得点と“交友満足度” 得点においては、出身校の主効果、出身校と学年の交互作用のいずれも有意ではなかった。

上記のような分析結果をもとに、オリエンテーションに対する期待や学生生活に対する満足度が、大学入学以前からの交友関係を比較的そのまま引き継いでいる内部生と新たに交友関係を築いていく必要のある外部生とでどのような違いがあるのか、またそれが大学生生活の経験を積むにつれてどのように変化するかについて考察する。

(1) 結果の①より、一回生のみ外部生の方が内部生より“機会期待” 得点が高かったのは、入学当初、外部生は内部生に比べ大学内に知り

表 1 出身校別 E・S 尺度平均得点

	内部生		外部生		
	1 回生	2 回生	1 回生	2 回生	
企画期待	3.51	3.46	3.52	3.20	
機会期待	3.79	4.04	4.17	3.96	内1 < 内2*, 外1 > 外2*, 内1 < 外1**
学業満足	2.73	3.13	3.19	3.35	1回生 < 2回生**, 内部生 < 外部生**
交友満足	3.37	3.44	3.41	3.41	
将来展望	3.85	4.39	4.02	4.07	内1 < 内2**, 内2 > 外2**

** $p < .01$, * $p < .05$

合いが少ないために、大学で親しい交友関係を築いたり、自分の生活の場についての情報が得たりする機会をより積極的に、強く求める、という心理が表れたと考えることができるだろう。

- (2) 結果の①より、二回生では“機会期待”得点において内部生と外部生で差が認められなかった。このことを考察するためには、今回の調査対象である一回生と二回生とがそれぞれ経験したオリエンテーションの違いを考慮に入れる必要があるだろう。すなわち、今回の調査における二回生が一回生であった際に実施されたオリエンテーションは、その時期も10月と遅く、内容的にも新たな交友関係を築く機会としては意図されていなかった。このため、二回生時点で回顧的に入学時のことを振り返ったときに内部生も外部生も同様に新たな交友関係を築く機会となるようなオリエンテーションを経験しなかったと感じている可能性が考えられる。
- (3) 結果の④より、内部生と外部生で“交友満足度”得点に差が見られなかったのは、オリエンテーションを含む初動教育及び学生生活の環境が、入学時には大学内に友人や知り合いが少なかった外部生にとっても、内部生と同じ程度の交友関係を築く機会として有効に機能しているためであると考えられることができる。
- (4) 結果の①より、内部生では二回生の方が一回生より“機会期待”得点が高かったのと対照的に外部生では一回生の方が二回生より“機会期待”得点が高かったことに関しては、以下のように考察することが可能である。すなわち、一回内部生は入学以前からの交友関係を比較的そのままに引き継いでいるため、入学当初にそれほど新たな交友関係を築く機会を期待しないのに対して、二回内部生では大学生活を経ていく中で実際に交友関係が変化

し、必ずしも入学以前の交友関係だけで大学生活が進行するわけでないことを経験し、その経験から振り返って新たな交友関係を築く機会を入学当初に得ることの重要性を感じるのではないだろうか。一方、現在の二回内部生は、入学当初に新たな交友関係を築く機会を与えるようなオリエンテーションを経験することなく、それでも(3)で述べたように内部生と同程度に満足な交友関係を築いてきた実体験がある。このため、二回外部生では、一回外部生ほどには新たな交友関係を築く機会をオリエンテーションに期待しないのではないかと考えられる。

- (5) 結果の③より、二回生でのみ内部生の方が外部生より“将来展望”得点が高かったことから、以下のようなことが考察される。すなわち、内部生は、外部生ほどには大学入学以前に自らの将来を考え、進路を選択するという内的作業を深めていない場合が多く、入学当初は以前からの交友関係や生活スタイルを比較的そのままに引き継いで生活しているので安定しているが、大学生生活を積み重ね、卒業や就職に近づいていく中で、次第に将来に対する不安が高まるのではないだろうか。一方、外部生の場合は、進路選択・大学選択の時に、将来について考えを深めているので、内部生よりは入学してから将来に対する意識や不安が高まるということが少ないのではないかと考えられる。
- (6) 結果の②より、外部生の方が内部生より“学業満足度”得点が高かったことに関しては、これまでの考察をふまえると、以下のように考察できる。すなわち内部生に比べ外部生の方が大学入学当初に新たな交友関係や情報を積極的に求めていくため、大学が提供する人や情報との出会いに対する関心やコミットが強く、そのことが大学が提供する学業を享受するためのレディネスを整備し、学業への満

足度を高めているのだらうと考えられる。

- (7) 結果の④より内部生と外部生では“企画期待”得点に差が見られなかったが、このことに関しては、“企画期待”得点と“機会期待”得点の間に有意な正の相関が見られた(佐久田ら, 2003)ことと, 上記のように一回生では外部生の方が内部生より“機会期待”得点が高かったことを考え合わせると, 以下のような解釈が可能となる。すなわち, 正の相関が見られた一方の“機会期待”得点において差(一回外部生>一回内部生)が見られたのに, もう一方の“企画期待”得点では差が見られなかったということは, 数値を相対的なものとして捉えると一回生では内部生の方が外部生より“企画期待”得点が高い, すなわち一つの企画・イベントとしてオリエンテーションを期待しているということを示しているのだと考えられる。

2. オリエンテーション獲得尺度(G尺度)の下位尺度得点による内部生と外部生の比較

E・S尺度と同様に, G尺度の下位尺度である“一回生との親密化”“企画充実感”“上回生からの情報獲得”“教員との関係”“獲得困難”の5つについて, 内部生と外部生との差異に関するt検定を行った(表2)。その結果, “企画充実感”得点に5%水準で有意差が見られ($t_{(122)} = 2.12$, $p < .05$), 外部生の方が“企画充実感”得点が高いことが示された。その他の下位尺度において有意差は認められなかった。

“企画充実感”とは, オリエンテーションが有意義であると感じられたかどうか, 一回生同士, あるいは上回生や教員との親密化を促すために企画された「人間知恵の輪」「人間椅子」のゲームが楽しかったかどうかを測る尺度である。この得点が高ければ充実感が高かったことを表すが, 出身別によるこの平均得点(5段階評定の5点満点)を見てみると, 内部生が2.96, 外部生が3.33と, 内部生の平均得点が3.00をわずかに下回っていることがわかる。

G尺度中, “企画充実感”以外の下位尺度では内部生, 外部生の間には差が見られていない。したがって, 内部生の“企画充実感”得点の低さは, 他一回生との親密化がはかれたかどうか, 上回生から情報が獲得できたかどうかといったことと関係があるとは考えられない。しかし先述のE・S尺度の分析結果では“機会期待”得点が内部生と外部生とで差異が認められている。つまりオリエンテーションを通して新しい交友関係を築いたり, 様々な情報をオリエンテーションの場で獲得したりしようという動機が, 外部生に比べて内部生で低いことが示されている。オリエンテーションにて実施した企画は, 新入生ができる限り多くの一回生と親しくなれるように, また上回生や教員と親しく接することのできる機会を設けるという目的に基づいて考えられたものであった。しかし外部生に比べ既に大学内に友人や知り合いの多い内部生にとって, そのような欲求は外部生よりも低く, そのことが“企画充実感”に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

表2 出身校別 G 尺度平均得点

	mean (SD)		df	t
	内部	外部		
一回生との親密化	3.00 (1.02)	3.08 (.91)	123	.383
企画充実感	2.96 (.86)	3.33 (.84)	122	2.124 *
上回生からの情報獲得	2.95 (.98)	2.98 (.87)	123	.147
教員との関係	2.93 (.94)	2.86 (.90)	122	.388
獲得困難	2.15 (.68)	2.01 (.65)	123	1.011

* $p < .05$

3. オリエンテーション期待尺度 (E 尺度)・学生生活満足尺度 (S 尺度) の下位尺度得点による自宅生と下宿生の比較

出身校別の分析と同様に、E・S 尺度の因子分析から得られた“企画期待”“機会期待”“学業満足度”“交友満足度”“将来展望”の各下位尺度について、居住形態（自宅生／下宿生）と学年（一回生／二回生）を二要因とする分散分析を行った（表3）ところ、以下のような結果が認められた。なお、ここでも佐久田ら（2003）の分析との重複を避けるため、学年の主効果については言及しない。

- ① “機会期待”得点において居住形態と学年の交互作用が傾向として見られた ($F_{(1,264)} = 3.64$, $p < .10$) ため、単純主効果の検定を行った。その結果一回生においては居住形態の効果が有意であり ($F_{(1,264)} = 5.01$, $p < .05$)、下宿生で“機会期待”得点が高いことが示されたが、二回生においては、その効果は認められなかった ($F_{(1,264)} < 1$, ns)。また自宅生においては学年の効果が認められなかった ($F_{(1,264)} < 1$, ns) が、下宿生においては学年の効果が有意であり ($F_{(1,264)} = 7.12$, $p < .01$)、二回生よりも一回生で“機会期待”得点が高いことが示された。
- ② “学業満足度”得点において居住形態 ($F_{(1,267)} = 7.80$, $p < .01$) に主効果が見られ、下宿生で自宅生よりも“学業満足度”得点が高いことが示された。
- ③ “交友満足度”得点においては交互作用が有意であった ($F_{(1,267)} = 3.98$, $p < .05$)。単純主効

果の検定を行ったところ、自宅生においては学年の効果は認められなかった ($F_{(1,267)} < 1$, ns) が、下宿生においては学年の効果が認められ ($F_{(1,267)} = 4.84$, $p < .05$)、一回下宿生での“交友満足度”得点が二回下宿生の“交友満足度”得点より高いことが示された。

しかしこれらの結果は、内部生のほとんどが自宅生であることの影響もあると考えられる。そこで、内部生を除いたデータを用いて、再度同じ分析を行った（表4）。その結果、有意となったのは“交友満足度”得点における交互作用 ($F_{(1,190)} = 4.79$, $p < .05$) のみであった。単純主効果の検定を行ったところ、学年の主効果が下宿生においてのみ有意であり（自宅生： $F_{(1,190)} < 1$, ns 、下宿生： $F_{(1,190)} = 5.62$, $p < .05$)、一回下宿生の“交友満足度”得点が、二回下宿生より高いことが示された。また一回生においてのみ居住形態による効果の傾向が認められ（一回生： $F_{(1,190)} = 2.87$, $p < .10$ 、二回生： $F_{(1,190)} = 1.96$, ns)、一回自宅生よりも一回下宿生で“交友満足度”得点が高い傾向が認められた。

以上の結果から、居住形態と E・S 下位尺度の関連性について考えていきたい。

- (1) 結果の①より、“機会期待”すなわちオリエンテーションで大学での交友関係や大学生活に関連する知識を獲得したいと期待する側面は、全体（内部生を含む）としては一回下宿生で高い。一回下宿生が地方から出てきて間もなく、大学外での交友関係もほとんど成立

表3 居住形態と学年の違いによるE・S尺度平均得点

	自宅		下宿		
	1回生	2回生	1回生	2回生	
企画期待	3.55	3.23	3.41	3.49	
機会期待	3.99	4.00	4.26	3.94	自1 < 下1*, 下1 > 下2**
学業満足	2.98	3.23	3.34	3.50	1回生 < 2回生+, 自宅 < 下宿**
交友満足	3.32	3.43	3.62	3.21	下1 > 下2*
将来展望	3.97	4.19	3.95	4.11	1回生 < 2回生*

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表4 居住形態と学年の違いによるE・S尺度平均得点（内部生を除く）

	自宅		下宿		
	1回生	2回生	1回生	2回生	
企画期待	3.54	3.14	3.46	3.42	
機会期待	4.12	3.98	4.30	3.90	1回生 > 2回生**
学業満足	3.14	3.30	3.32	3.46	
交友満足	3.30	3.44	3.63	3.16	自1 < 下1 ⁺ , 下1 > 下2*
将来展望	4.05	4.08	3.94	4.12	

** p < .01, * p < .05, + p < .10

していないとすれば、大学当初のオリエンテーションに交友関係や学生生活を充実させるきっかけを期待するのは当然と思われる。しかし内部生を除いて分析を行うと、自宅生と下宿生との間に差異が認められなくなる。オリエンテーションが催される段階では、外部生であれば自宅生か下宿生かに関わらず、大学内でいまだ交友関係が十分に成立しておらず大学に関する知識も不十分という点で変わらないため、同様に“機会（に）期待”すると考えられる。二回生になってこの得点が下がるのは、一年間経ってみれば、必ずしもオリエンテーションのみが友人を作ったり大学を知ったりする唯一の機会ではないと考えるようになるためであると推測される。

- (2) 結果の②より、“学業満足度”得点は、全体では居住形態の違いによって差が見られるが、外部生に限ればこの差はなくなるので、内部生による影響と思われる（1. 出身校別の分析参照）。
- (3) 結果の③より、“交友満足度”得点は出身校にほとんど関係なく、一回下宿生が二回下宿

生や一回自宅生より高い。これは一回生下宿生が自宅生に比べ、地元を離れて様々な面でそれまでのつながりから一旦切り離されて暮らしをスタートさせており、交友関係でも生活面でも大学の占める割合が高いためと思われる。二回生時には下宿生であってもアルバイトなどの課外活動が充実し始め、大学外の交友関係も増え、相対的に大学の比重が軽くなるためではないかと考えられる。

4. オリエンテーション獲得尺度（G尺度）の下位尺度得点による自宅生と下宿生の比較

G尺度の下位尺度“一回生との親密化”“企画充実感”“上回生からの情報獲得”“教員との関係”“獲得困難”の得点について、一回生、二回生それぞれで自宅生と下宿生の平均値の差のt検定を行ったところ、すべての下位尺度に関して有意な差は認められなかった（表5）。またこの結果は内部生のデータを削除しても変わらなかった（表6）。すなわち、自宅生か下宿生かの違いによってオリエンテーションで、何を獲得したと感じているかについては差異が認められないということである。

表5 居住形態別G尺度平均得点

	mean (SD)		df	t
	自宅	下宿		
一回生との親密化	3.07 (.96)	2.99 (.90)	124	.402
企画充実感	3.21 (.86)	3.30 (.85)	123	.495
上回生からの情報獲得	2.99 (.93)	2.90 (.79)	124	.464
教員との関係	2.90 (.91)	2.80 (.90)	123	.576
獲得困難	2.03 (.66)	2.10 (.63)	124	.461

表6 居住形態別G尺度平均得点（内部生除く）

	mean (SD)				df	t
	自宅		下宿			
一回生との親密化	3.08	(.92)	3.04	(.91)	90	.179
企画充実感	3.30	(.85)	3.41	(.82)	90	.598
上回生からの情報獲得	2.96	(.93)	3.00	(.73)	90	.178
教員との関係	2.86	(.90)	2.85	(.92)	90	.094
獲得困難	1.96	(.64)	2.14	(.65)	90	1.277

5. 総合考察

まず内部生と外部生とでは、オリエンテーションに対する期待・態度や学生生活への満足感に様々な点で差が見られた。結果から推察されるのは以下のようなことである。まず内部生は、交友関係が内部生同士で既に形成されており、入学当初のオリエンテーションには、関係を形成する機会よりも、企画としてより楽しみたいという意識がある。これは外部生が、交友関係をつくるきっかけとしてオリエンテーションに期待するのと対照的である。しかし二回生になると、内部生は固まっていた内部生同士の交友関係もゆるぎ始め、逆に外部生はある程度交友関係が安定し始め、オリエンテーションによる交友関係形成の必要性に対する認識に差異が認められなくなる。なお、内部生が一回生から二回生にかけて揺らぐのは将来への展望、不安感についても同様であり、外部生と内部生との間で、学年進行に伴って大学への適応のプロセスに差異があることもここから窺える。

以上を踏まえると、オリエンテーションを実施するにあたっては、交友関係形成のきっかけを期待する外部生と、企画に期待する内部生の両者の志向性をバランス良く取り入れることが重要であると考えられる。特に内部生には、企画面を充実させ、オリエンテーション全体への関与度を高めることで、ひいては内部生同士で固定しがちな交友関係の開放化、活性化につなげることが可能であろう。このように、内部生と外部生の違いを大学生活スタート時における交友関係の成立、不成立にあると考えてきたが、調査結果からは、それ

以外にも両者の間に差異があることも推察される。特に内部生に認められる学業に対する満足感の低さや、学年進行に伴う将来への不安感の増大は、ある種のアイデンティティの危機に直面していることを表しているとも考えられる。さらには、二回生になってあらためて交友関係の再確立を求める傾向も、こうした原因と絡むものであるのかも知れない。こうした点を鑑みると、内部生、外部生の差異は、単なる交友関係の違いのみならず、入学に至るまでのプロセス、すなわち進学形態のさまざまな違いによって影響を受けている可能性もある。内部生、外部生のこうした違いについても、今後、面接等の手法を用いてより詳細な検討を加えていく必要があるだろう。

一方で、自宅生であるか下宿生であるかの違いがオリエンテーションへの期待や評価あるいは学生生活の満足感に与える影響はあまり認められず、尺度によっては学年で多少の差が見られる程度であった。下宿生の大多数が初めての一人暮らしをスタートさせており、その学生らにオリエンテーションが重要な役割を果たすのではないかも考えられたが、新入生という点では自宅生、下宿生の区別なく大学生活や交友関係に期待や不安を抱えており、オリエンテーションへの態度や学生生活への満足感に際立った差がないようである。こうした結果は、大学外での交友関係において異なると想定された居住形態による差異は、あくまでも大学内の交友関係を広げる意図で企画されるオリエンテーションに対する態度に対してはあまり影響を及ぼさないのだと解釈することが可能であ

る。しかしながらたとえ大学外での交友関係が維持されやすい状況にある自宅生であっても、大学に馴染むためのオリエンテーションの意義は小さくない。むしろ、交友満足度が一回生下宿生において高いのであるから、自宅生が大学内での交友関係を結ぶためのきっかけとして、オリエンテーションをより積極的に活用してもよいとも考えられる。

なおこれらの結果において、特に学年によって差が見られたところは、これが実際に大学生活の経験を経ることによる変化であるのか、それとも調査を実施した年度の一回生と二回生の集団の性質の違い（コホート差）なのか、今回の調査では単年度のデータのみなので、十分に吟味することができない。別の年度の一回生、二回生に調査を実施してデータを加えて再度分析する、あるいは今回調査した年度の一回生が二回生になったときに再度調査を実施することによって、今回の分析と考察の信頼性を高めていくことができるだろう。

また、今回と同じ調査を三回生や四回生にも実施し、結果がどのように変化するかを調べることにより、大学生生活の経験を積む中で内部生と外部生あるいは自宅生と下宿生の心の動きに関する考察をより妥当性の高いものに練り上げていくことができるだろう。

引用文献

- 藤田哲也 2002 大学基礎講座 北大路書房
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 2003 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2) - personality との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 73-82.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 2003 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) - オリエンテーションに対する態度の基礎データ - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-71.
- 植村善太郎 2003 中高一貫校への外部入学者の対人関係と学校適応感 - ある国立大学附属高校における事例的検討 カウンセリング研究, 36, 57-67.

Some Effects of Personal Traits on the Attitude to the Fresher Orientation Event (3)

— The Relationship Between the Attitude to FOE
and Alma Mater High School and Residential Pattern —

Osaka Shoin Women's University

Masahiro KAWAKAMI, *Hiroyuki* SAKATA,
Yuko SAKUTA, & *Akira* OKUDA

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between students' alma mater high schools and residential pattern and their attitude to the fresher orientation event (FOE). With the questionnaire of the students' expectation to the FOE (E-scale), the gain they recognize to have got in their FOE experience (G-scale), and the satisfaction they feel in their university life (S-scale), the attitude to the FOE was measured.

The individual differences; the alma mater high schools (University affiliated high school vs Other high school) which was assumed to affect the intramural friends and acquaintances at the time of starting university life, and residential pattern (Home students vs Lodging students) which was assumed to affect the friends and acquaintances outside the university at the time of starting university life were examined.

The results showed that students from university affiliated high schools have less expectation on the opportunity to build intimate friends and acquaintances at the university, or for the information about the university than students from other high schools. And they also have less feeling of fullness on the FOE as an event.

The influence of the residential pattern on the attitude to FOE was rather weak, and this result suggests that students take FOE as the event which can build friends and acquaintances only in the university.

Keywords: fresher orientation event, student life, alma mater high schools, residential pattern